

# なな山だより

なな山緑地の会会報 創刊号 2005・9

美しい里山、なな山緑地を皆の力で、守り、育てていこう。



朝のミーティング風景

## ごあいさつ

なな山緑地の会会長 高木直樹

百草団地に隣接する緑地を管理する「なな山緑地の会」も多くのみなさまに支えられて満一年を迎えました。この一年を通じ環境問題にかかわる者として責任感、又、満足感をもって楽しく活動してまいりました。今回、会報を発行するにあたり一言ご挨拶申し上げます。

いま、地球規模で進んでいる環境破壊問題に多くの人々が憂いておりますが、一方でまた多くの人々がボランティアを中心にこれを守ろうと活動しておられます。私たち「なな山緑地の会」もこうした問題に真摯に取り組んでおります。これからも、この美しい里山、なな山緑地を守り育てる事を通じて、環境を守る一助になればと思っております。

最後に、この紙面をお借りして、緑地を寄付していただいた住崎様、緑地を残すにあたり尽力していただいた「和田百草園住宅自治会」のみなさま、会の設立前からアドバイスを頂き、また刈払機などを快く貸していただいた「倉沢里山を愛する会」のみなさま、私たちの活動に賛同して、寄付を頂いた企業の方々、会の設立に当り、ご協力頂いた、多摩市の公園緑地課、環境会議のみなさま、森木会のみなさまに心より御礼申し上げますとともに、今後一層のご指導、ご支援をお願いし、ご挨拶とさせていただきます。

## なな山緑地の会設立までの経緯



創刊号なので私たちの会ができるまでの経緯について会員みなさまに知っていただこうと思い、高木さんに寄稿していただきました。次号からは今迄の活動の状況などをお知らせしたいと思います。

- 平成13年12月7日 『和田百草園住宅自治会』の総意により多摩市長あて「緑地保全」要望書提出。
- 平成14年10月6日 多摩市公園緑地課の進藤課長が自治会を訪れ、「緑地保全」につき、報告あり。「報告の要旨」自治会より提出されていた要望書にたいし報告が遅れ申し訳なかったが、緑地の一部が府中の住崎氏より、多摩市に寄付された。  
しかし今、市としては財政難で予算また人材を提供することは困難なのでなんとか自治会を中心にボランティアで管理して欲しい旨の要請を受けた。
- 平成15年1月19日 公園緑地課の進藤課長、市の環境会議の有志(後の森木会)が初めて、なな山を見学を訪れる。
- 平成15年1月26日 自治会有志で将来のボランティア立ち上げの準備会を開催。
- 平成15年2月23日 自治会有志、多摩市環境会議有志で第一回の下草刈を行なう。
- 平成15年2月27日 多摩市環境会議に高木の出席を要請され、なな山の将来について説明し、協力を依頼する。
- 平成15年3月16日 前月と同じメンバーで第二回下草刈を行なう。
- 平成15年3月～4月 自治会より市に対し、寄付を要望する地権者に対し、測量などに関わる経費の負担を軽減するよう要望書を提出。
- 平成15年4月26日 森木会第一期生の講習をなな山で行なう。自治会の有志も6名参加。
- 平成15年6月4日 市役所にて進藤課長、伊藤氏(市側)、川添氏(森木会会長)、高木(なな山緑地の会代理会長)の三者で「なな山緑地の会」設立の意見交換をする。
- 平成15年11月16日 二、三月と同じメンバーで下草刈と落葉掃きを行なう。
- 平成16年1月8日 相田さんを中心に森木会和田班のメンバーが山開きを行なう。
- 平成16年1月26日 自治会有志と森木会和田班メンバーで作業を行なう。
- 平成16年2月4日 百草団地管理事務所を訪問し、ボランティア設立の趣旨説明と団地内の掲示板使用許可を要請し許可される。
- 平成16年2月8日 前月のメンバーで作業を行なう。
- 平成16年3月28日 市内、竜が峰小学校で「なな山緑地の会」設立総会を開催。
- 平成16年4月1日 「なな山緑地の会」設立。現在に到る。

注．平成17年7月31日現在の会員数は、賛助会員を含めて30名。会員の構成は、自治会会員9名、森木会会員12名、その他(自由参加)9名となっている。



冬になると決まって父が農作業を休み、多摩の里山へでかけ、雑木の萌芽更新とクズ掃きを毎年繰り返し、雑木林を維持してきた。雑木は薪に、落ち葉は堆肥に、実家の営み全てにおいて和田の山が源であった。今の農家は高齢化が進み、農薬、化学肥料に頼り、農家の基本である「土づくり」は忘れ去られている。畑があるから、里山があるのではなく、里山があるから、畑があるのだ。

相続が発生すると農地は相続猶予を受けることができるが、おかしな事に里山は宅地なみに評価される。今、環境問題で里山の大切さが理解されていても、先祖が維持してきた里山を守る対策がない。私は相続する里山を維持できる仕組みがないものと会社を辞め奮闘したが、寄付する以外に里山を保全する方法が見当たらなかった。寄付に当たり、渡辺市長と「亡き父が実施してきた雑木林の維持管理を目的とする農家の知恵を生かした雑木林管理」を絶対条件とした。(市は基本計画で網をかけていながら保全する仕組みが何一つ無く、地主は寄付するため必要な費用まで全部負担しなければならなかった。因みに横浜市では、里山寄付の諸経費は市が負担する里山条例が整備されている。)

父が他界しすぐ、会社を辞めたので収入は零となり、生活が脅かされた。相続税を払うために家族を犠牲にしてきた。妻、子供には今でも大変な思いをさせている。

雑木林ボランティア活動も2年目を迎え、会員も増え、月2回の活動日も大勢の方に参加して頂いている。この里山が一般の公園と全く異なっている点について農家を続けている私が啓発していかなければならないと考えている。里山保全という言葉は今、良く耳にするが、里山保全は公園管理と違い、農家が農業と里山を結びつけていたことを良く理解しなければならない。農家がなぜクズ掃きをしてきたのか。雑木林と畑との密接な関係。そして今の時代だからこそ、食に関して何が我々にとって安全なのかなどを。多摩市に寄付したとはいえ、寄付の基本は「里山」を次の世代に今と変わらぬ姿で残すことであり、人工的な公園とは、全く異なる雑木林の植生を絶やさない活動をしなければならない。子供たちの自然学習の場として。

## なな山つれづれ草

連載第一回

中原君代

### オオバギボウシ *Hosta Sieboldiana* Engl. ユリ科

7月中旬、「なな山緑地」では梅雨の中でオオバギボウシの花が咲き始めた。ギボウシの名は橋の欄干についている擬宝珠に花序が似ていることに由来するもの。

学名はシーボルト(1796 ~ 1866)によってヨーロッパにもたらされたため、シーボルトに因んでつけられた。



オオバギボウシ H17-7-24  
なな山緑地にて撮影

シーボルトと日本との関わりはシーボルトが長崎の出島商館長の侍医として来日したことに始まる。当時ヨーロッパでは、鎖国下の日本は神秘的な国であるとともに、ヨーロッパの地で育成できる植物の宝庫である事が知られていた。

日本滞在中のシーボルトは長崎の出島に植物園を作り、日本の植物の収集と植物画の製作、民族資料の収集にいそしんだ。1829年9月オランダへの帰国の直前に台風に襲われ、禁制品を持ち出そうとしていたことが発覚し、シーボルトは永久国外追放になった。

だが、帰国にあたって用意した膨大なコレクションは無事にライデンに到着した。その中には生きた植物 2,000 点と標本 12,000 点があり、その植物の中にギボウシがあった。数ヶ月の船旅をして到着した植物は、その後 15 年を経るうちに生き残ったものは 40 種類になったといわれている。ギボウシのあの大きく太い根が生命を繋いだと思われる。

当時のヨーロッパにはギボウシの何種類かはすでに中国から、もたらされていた。

現在のアメリカでは The American Hosta Society (アメリカギボウシ協会) ができるほどの人気。葉が美しくボリュームがあることから、欧米ではグランドカバーとして庭植えされていることが多い。

# 広げよう会員の和



## リレー随筆 (1) 山動く

相田幸一

昔の書き手が言っている。「行く川の流れは、絶えずして、しかも、元の水にあらず」と。雲も風も流れ動いている。空気も雨も留まることはない。だが、山については、「動かざること山の如し」と動かないものの代名詞となっている。本来動きそうもないことや、社会的情勢が根元から変動することなどが生じたとき、山が動くと言ったりする。「山が笑う」という言い方は、古くからある。早春から新緑の頃まで、樹木に覆われた山が、春を告げるコブシやキブシの花から、木々の芽吹き、ヤマザクラの花へとその色合いを変え、数々のみどりを色濃く染めていく、その移ろいをそうあらわしているのだ。多摩の山といえ、それは雑木林を指している。多摩の雑木林に関わって、内から外から、汗まみれの労働と感性をフル回転させて感じるそれは、いろいろ多様な動き、変化に満ちている。雑木林という自然界は、一年をひとつのサイクルとして、繰り返しの営みを続けている。それが四季という季節の変化の中で私たちに違った姿を見せてくれる。

ところが、こういう考え方は私たちの生活環境、社会環境から見れば当然のこととして捉えることができるが、山に入って体験を繰り返していくうちに、少し考えを変えなくてはならなくなった。山に人の手が加わると、山も変わるのだ。混み合った林を、間伐して少し日照を増すと、今まで眠っていた潜在的な植物が芽吹いてくるのだ。下草を刈ると、目立たなかった草本が勢いをつけてくる。つる草の絡みを根気よく取り払ってやると、より美しい花を咲かせてくれる。落ち葉を集積した場所には、数え切れないカブトムシの幼虫が見つかり、草を刈ったあとに出てきた虫に小鳥たちが群れた。散策の道をつけて、じっくり周辺を観察すると、コナラのドングリからかわいい双葉が出て少しずつ大きくなってきた。新しい草花も見つかった。木々の目立たない花や実が、葉の蔭に、ひっそり着いているのを見つけることもできた。作業をしているすぐそばに来て私たちに語りかけるかのように姿を見せたのは、アオジかジョウビタキ、ウグイスか。山は私たちを自然の一部として、仲間として迎え入れてきていると感じる。山は生きている。動いているといっても良いと思う。機会あるごとに山の動きを書き留めていきたい。

次の会報では、馬場さんにこの欄のバトンを渡したい。この雑木林では最も多量の汗を流しているように思うからだ。

## お知らせ

\* なな山緑地の会の活動日は、毎月第2、第4日曜日です。

### 三班合同懇親会について

一本杉班、中央公園班、なな山緑地班の合同懇親会が開催されます。全員で参加しましょう。

開催日 11月26日(土)

場所 一本杉公園 加藤家

当日の予定 10時 グリーンライブセンターに集合。中央公園、どんぐり山、一本杉公園を見学しながら加藤家へ。

12時頃 参加者全員加藤家に集合、懇親会スタート。2時半 懇親会終了。

3時頃 全員であとかたづけを終えて解散。参加費 1000円/人

なな山だより 創刊号 平成17年9月11日発行  
発行所 なな山緑地の会  
発行責任者 高木直樹  
住所 多摩市和田1394-13  
編集委員 鎌田文雄・中原君代

### 編集後記

手探りで何とか創刊号をだしました。少しずつ内容も充実していきたいと思います。奮って寄稿いただくようお願いいたします。誤字、脱字ご容赦ください。 F・K